出会い（17）

――新大久保駅事故に寄せて特別記事――

奥村　一郎

地域戦争の絶えない現代世界のなかで、なんとはなく泰平ムードの温もりの中で、引き締まらない日々を過ごしているところに、突如、目を覚まされるような涙の悲劇が起きた。正月末のこと、首都東京の山手線の一角、新大久保駅のホームから転落した人を救おうとして跳び降りた二人の男性もろとも三人が電車の下に轢きこまれて亡くなった。「愛と死」という人生における最大の問いが、我々に投げつけられたかのようであった。

生ける愛の炎

―― 新大久保駅事故 ――

1月26日（金曜）夜7時半頃、新宿駅の手前、山手線新大久保駅のホームで、酒酔いのために線路に転落した人を助けるため跳び降りた、二人の男性もろとも三人が電車に轢かれた出来事は、数日のあいだ新聞雑誌の紙面を埋めた。たまたま少し前、私は新大久保駅を通り過ぎて来たことに気付かされ、剣で胸を突き刺されたような衝撃であった。

そのころ、東京近辺ではパラパラと降り始めた雪は翌日まで止まず、稀な大雪が京浜地区を真っ白に覆った。あたかも、亡き三人の死を弔うかのように。ひとりは日本語勉強中の韓国人留学生李秀賢さん（26才）、もうひとりは、カメラマン関根史郎さん（47才）、線路に落ちたのは坂本成晃功さん（37才）。ホームからの転落事故は毎年数10件あるものの、見知らぬ人を助けようとして、2人の人が亡くなるということは皆無であるという。（毎日新聞 2001年 2月3日 土曜日）

1．死との出会い

確かに、命と死とは両立することも、共存することもできない。命は命、死は死、死は生との断絶である。だが、あの日、その時、この全く相反する生と死との激突から噴き上げる凄まじいまでの愛のドラマは、たちまち日本全土から韓国にまで報道され、多くの人の感動を呼び覚ました。告別式には帰国したばかりの森喜朗首相や河野洋平外相ら日本政府の要人が相次ぎ姿を見せた。一方、1月30日、李さんの遺骨が故郷の韓国、釜山に戻ると追悼ムードは頂点に達した。同日、金大中大統領は閣議で李さんを「国家有功者」に認定して、国民勲章の授与と遺族に対する補償金の支給を決定。さらに、担当秘書官を釜山に派遣して弔意を伝える、破格の礼遇を示した。さらに、李秀賢さんの記念碑の話題も取り上げられてきている。（同上毎日新聞より）

奥村　一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンス宗教研究所）など多数。

2．「友のため自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15,13）

ヨハネ福音書の中に記されているこの言葉は、ここでそのまま当てはまるように思われる。ところで、先ず「友のために」という冒頭の言葉を取り上げてみたい。李さんと関根さんの二人にとっては、坂本さんは友人でも知人でさえもなかった。全く見知らぬ他人であった。もし友であるなら、そのために自分の命を捧げてくれる人があるのも稀ではない。決して易しいこととはいえないにしても。川で溺れそうになった生徒を救おうとして、自分の命を捧げた小学校の教師もあった。宗教の場合には殉教者がある。そこにある死は、動機や目的は様々であるにせよ、いずれも、死を突破させるほど激烈な愛の明確な絆があった。そこには職務上の責任感と生徒への愛情など、また、一途の信仰や教祖への絶対的帰依などが死も怖れぬ力を与える。それに対して、あの時、偶然そこに居合わせた二人の男性に死の決断をさせたのは、親子、兄弟の血縁でもなく、師弟、あるいは、同じ信仰上の友でもなかった。そこには、前にも後ろにも、何も見えない暗黒の砂漠の死があるだけだった。民族も国家も宗教も、この世の一切の壁を越えた純粋な人間愛の極限における、いわば、尊厳死であった。すなわち、そこで愛の決断をさせたものは、今眼前の危険にある「一人の人間」というだけ。「一人の人間の価値は地球よりも重い」といわれる。そこにあるものは、単なる、幅広いヒューマニズムの博愛主義ではない。そこでは、「この人ひとり」が、掛け替えのない「唯一の人間」として受け止められた。

李さんの家族は仏教であり、関根さんは、宗教には無縁のようであった。しかし、その二人は、「人間は人間である」という一事に、無限の尊さを見たに違いない。「人間が本当に人間であるなら、どんなに美しいだろう」といった哲学者もいる。真の人間にとっては、

愛と死とは切り離せない。しかも、その愛は血縁、知縁、民族も国家も越えて、一人の人のために自分の命を捨てる大胆な勇気を与える。もう遠い思い出だが、カルメル会修道院に入るため、横浜から約1ヵ月の長い船旅を終えて、フランスのマルセイユ港に着いたとき、日本から届いた最初の手紙に、フランス語で書かれた修道女の言葉が思い出される。「愛と死とは同意語です」。

3．相互愛　「私は、あなた方に新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したように互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなた方が私の弟子であることを皆が知るようになる」（ヨハネ13,34-35）

一般に、キリスト教の教えの本質は、「神の愛と隣人愛」であるといわれる。確かにそうである。しかし、正確ではない。なぜなら、その二つの掟は旧約時代のものであって新約時代のキリストの教えではないから。新約の教えは「キリストの愛と相互愛」である。古来、「山上の垂訓」といわれるキリストの教えの始めに、旧約と新約との関係が極めてはっきりと述べられている。「私が来たのは、律法や予言者を廃するためだと思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」（マタイ5,17）

「律法や予言者」とは、旧約を意味する。ということは、旧約時代の「隣人愛」の掟は「相互愛」という新しい掟によって完成されたことを意味する。つまり「私があなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい」というのがキリストのいう「新しい掟」である。つまり、「隣人愛から相互愛へ」の移行こそが重要である。このことを極めて明確に指摘したのが、若くして世を去ったテレジアというカトリック世界の著名なフランスの聖女である。隣人愛と相互愛との相違は、その愛の対象の幅の広さの違いにあるのではなく、愛の基軸の相違にあることを聖女は指摘する。頼りにもならない自分を基準にする隣人愛ではなく、命を捨てて私達を愛して下さったキリスト自身の無限の愛が基軸となる相互愛との相違を明確に示す。さらに、聖書記者ヨハネの言葉をとってみよう。「私達が愛を知ったのは、イエスが私達のために命を捨てて下さったからです。私達も兄弟のため命を捨てなければなりません」

（Ⅰ ヨハネ3,16）

ここでの「兄弟」という言葉には、あの時、あの夜、共に葬られた三人の名が秘められていることであろう。神のうちにおいては別離に終わる死ではなく、兄弟の死によって与えられる永遠の愛との出会いがあるに違いない。

想像することもできない三人のご遺族、ご親族の悲しみと痛みをお察ししながら、この紙面を借りて、それぞれのご家族に謹んで哀悼の意を表させていただきます。

P.G.I.のお知らせ

■ 石元泰博　写真展　2001年4月5日（木）－28日（土）
「顔」　"Faces"
写真家石元がレンズを通して捉えた、「顔」にテーマを絞り、1948年の習作から2001年の近作にわたる200余点のオリジナルプリントを展示します。代表作「ある日ある所」「シカゴシカゴ」や「東京の顔」、「伝真言院両界曼荼羅」「湖国の十一面観音」の他、数多くの街角でのスナップショットなどから、「顔」のイメージを抜粋し、構成されます。

■ 小島公子　写真展　2001年5月8日（火）－26日（土）
「私とポートレート」　"Present Portrait"

■ 久保田博二　写真展　2001年6月1日（金）－30日（土）
「アジアの映像」　"Images of Asia"

フォト・ギャラリー・インターナショナル
東京都港区芝浦4-12-32　TEL.03-3455-7827　FAX.03-3455-8143
JR田町駅芝浦出口（東口）より徒歩10分［入場無料］
営業日：月ー金　11:00ー18:00　土　11:00ー17:00
休館日：日曜日・祝日
＊P.G.I.についての詳しい情報はホームページ（http://www.pgi.ac）をご覧下さい。

表紙の写真

写真：クリス・スティール＝パーキンス
バングラデシュ、1989年

ー 表紙へのメッセージ ー

人が土に種を蒔いて、
夜昼、寝起きしているうちに、
種は芽を出して成長するが、
どうしてそうなるのか、
その人は知らない。
土はひとりでに実を結ばせるのであり、
まず茎、次に穂、そしてその穂には
豊かな実ができる。
（マルコによる福音書　４章２６～２８節）